

都道府県・指定都市番号	25	都道府県・指定都市名	滋賀県	研究課題番号・校種名	2 (5) 幼稚園・小学校
				領域名	校種間連携
研究課題	学校全体で取り組む研究課題 (5) 校種間の連携による教育課程の編成，指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
学校名 (園児・児童・生徒数)	滋賀大学教育学部附属幼稚園 (136人) 滋賀大学教育学部附属小学校 (612人)		学校・地域の特色及び実態等 ・幼稚園，小学校，中学校が同一の敷地にあり，ほぼ全員が附属幼稚園から小学校，中学校に進学する。 ・以前より 5 歳児と 1 年生の活動の交流はあるが，互いの子供の姿や育ちの共通理解についての協議は十分ではなかった。		
所在地 (電話番号)	〒520-0817 滋賀県大津市昭和町 10 番 3 号 幼稚園 TEL 077-527-5257 FAX 077-527-5262 小学校 TEL 077-527-5251 FAX 077-527-5259				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	附属幼稚園 HP http://www.fk.shiga-u.ac.jp/ 附属小学校 HP http://www.fs.shiga-u.ac.jp/				
研究のキーワード	教員の交流 子供の姿の記録 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 円滑な接続 継続した評価				
研究結果のポイント	○子供の姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共通の視点として分析するための記録用紙を作成し，子供の姿や教員が学んだことを記録した。教員が相互理解を深めたことで，学びのつながりを生かす指導の在り方が確認でき，指導の改善につなげることができた。 ○共通の視点を持って実践を共有したことによって，教員の相互理解が深まった。これを基に，幼稚園と小学校の教員が協働してカリキュラムの検討に取り組み，改善することができた。				

1 研究主題等

(1) 研究主題

幼児期から児童期への学びをつなぐ，カリキュラム開発
 ～子供の育ちの姿を軸にした，円滑な接続を図る指導の工夫～

(2) 研究主題設定の理由

中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月 21 日）で示されたように，学校段階等間の円滑な接続は，今日の学校教育における喫緊の課題である。中でも，幼児期の教育と児童期の教育の接続について，幼児期の教育で身に付けたことを生かしながら児童期の学びにつなげる接続が強く求められている。生活科を中心としたスタートカリキュラムを小学校の教育課程に明確に位置付け，指導や環境構成等の工夫によって，幼児期に総合的に育まれた資質・能力を，各教科等の特質に応じた学びにつなげていくことが求められている。このよう

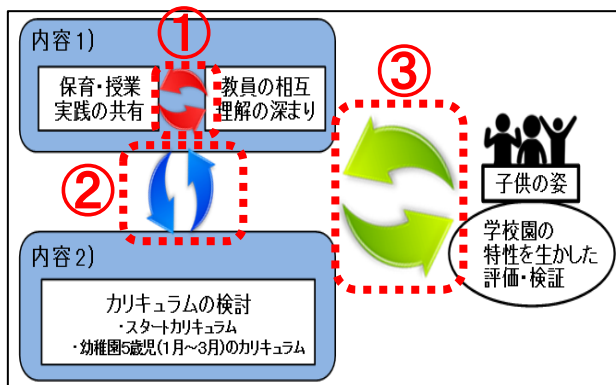


図 1. 研究のモデル

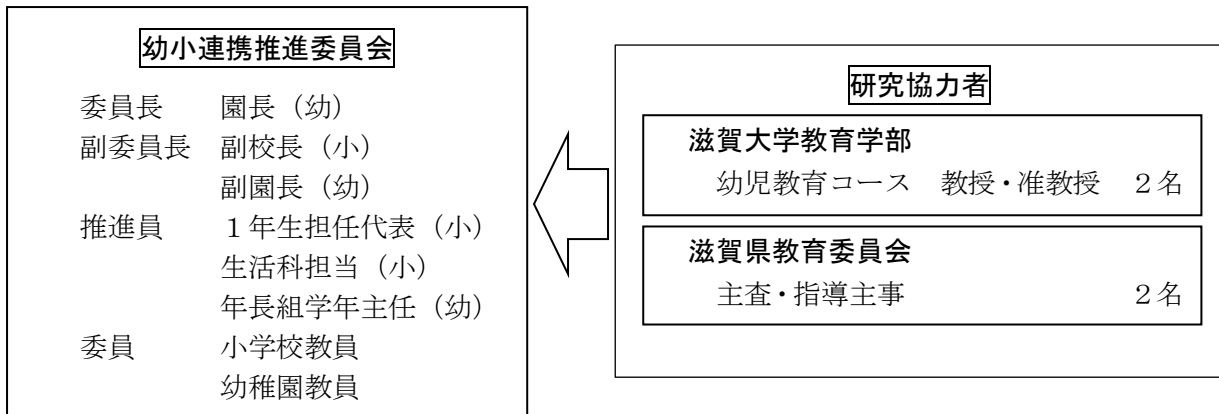
このよう

な考え方を各教員が共有し、実践していく必要がある。

滋賀大学教育学部附属幼稚園及び滋賀大学教育学部附属小学校（以下「本学校園」とする）は、同一の敷地にあり、子供たちのほぼ全員が本学校園内で進学する。これまでも、本学校園において育てたい子供の姿として共通している部分や研究方法の重なる部分はあったが、教員の交流や接続期に関わるカリキュラムの検証・共有は十分ではなかった。

そこで、本研究では、5歳児12月から1年生7月を接続期と捉え、幼稚園と小学校が協働し、本学校園の特性を生かした評価・検証を繰り返しながら、接続期のカリキュラム作成を行う（図1）。

(3) 研究体制



(4) 1年目の主な取組

平成29年度	<p>【通年】「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」を視点とした、教員の協働による子供の姿の読み取り</p> <p>①昨年度の5歳児（1月～3月）の活動（劇遊び）の姿から ②1年生前期の授業の姿から ③5歳児の活動の姿から ④共通の栽培活動（アサガオ）の姿から 幼…グループでの栽培 小…個人での栽培 ⑤交流活動の姿から 七夕飾り 虫取り おもちゃまつり</p> <p>【通年】保育参観・授業参観と研究会</p> <p>6月 小：授業を語る会 12月 幼：園内研究会 9月 幼：園内研究会 1月 幼：園内研究会 11月 幼：公開研究会 2月 小：研究発表協議会</p> <p>【11月～1月】幼稚園と小学校の教員の協働によるスタートカリキュラムの試案作成</p> <p>11月 小学校教員による試案作成 12月～3月 試案の協議・改訂</p>
--------	--

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

①保育・授業実践の共有

本学校園の教員が互いの教育実践を参観・記録し、子供の姿を基に協議した。その際の視点として「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」に基づき、子供の姿を分析した。また、教員が互いの保育・授業に入り、実際に異なる校種の子供と関わる機会をもった。実践の記録については、子供の姿を資質・能力に関連付けて分析するための記録用紙（図2）を作成し、記録や協議に活用した。そのことにより、「保育・授業実践の共有」と「教員の相互理解の深まり」の質が相互に高まっている。…図1①

さらに、協議によって生まれた教員自身の新たな気づきや学びを記録した。実践の共有や教員の相互理解の深まりがカリキュラム作成につながるように、幼稚園・小学校に共通する部分、独自性といえる

部分を探り、接続期にどこをどのようにつなげていくのか検討している。



6月12日(月) 5歳児 グループ活動 「1, 2, 3...5個!」			
活動	水やりをする (登園時)	アサガオの葉の様子が変わってきたことを話す	グループでプランターを囲い、アサガオの観察をする
幼児の姿	・A児は「葉っぱがいっぱいになってきた」と近くにいた教師や友達に言う(つぶやく)	・教師に「アサガオって今どうなっているの?」と聞かれたことをきっかけに「葉っぱがいっぱい」「大きくなっている」と言う ・友達の言っていることを聞いて頷くなど、言葉での発信がなく、会話に参加しにくい幼児もいる	(ほしグループ) ・「1, 2, 3...」と葉の数を数える ・友達の数えている声を聞き、自分の目の前にある葉の数を数える ・「これ、6個」「これ8個、あ、やっぱりくっついてた。4個やわ」「僕、5個」と自分が数えた葉の数を教師に言う ・B児が「水入れる?」とグループの友達に聞くと、C児が「入れた方がいいんじゃない?」と答え、立ち上がる  (ながれほしグループ) ・D児が「これ葉っぱやで」と蔓の先を指さす ・E児が蔓の先を人差し指で触る  ・D児が蔓の先を触りながら「ふわふわって感じ」と言うと、F児が「痛くないのは何でやるうな」とつぶやく ・E児が別の蔓の先を触り、「1, 2, 3, 4, 5」と葉の数を数える。隣のアサガオの葉も「...5」「...4」と数える ・F児はD児とE児のやり取りを側で見ています
能力	学【自然】	学【言葉】	学【言葉】 知【自然】【数量】
☆環境の構成 ◎教師の援助	☆登園時に自分で水やりを進んでできるようになるやたらを幼児の動線を考えて置いておく	◎教師も知りたいというわくわく感を出しながら、グループでアサガオの様子を見に行くことを提案し、今から何をするかを意識できるようにする	◎発見したことや、不思議に思うこと等、それぞれの気付きに対し、言葉を返して受け止めたり、一緒に見たりする ☆互いの気付きを取り入れ、刺激になるように他のグループの声も聞こえる位置で観察する ◎D児とE児のやり取りを見ていたF児にもアサガオの葉の触り心地や数に興味を向けてほしいと思い、誘いかける ◎「ふわふわ」と表現した幼児の言葉を受け、同じように「ふわふわかあ〜」と応える

図2. 記録用紙の使用例

知…知識・技能(の基礎) 思…思考力・判断力・表現力等(の基礎) 学…学びに向かう力・人間性等
【自然】などの略号については、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から2字を取って表記した

②接続期のカリキュラムの作成・検証

幼児期の自発的な活動としての遊びを通して育まれたことが、小学校の学習につながるように、「生活科」を中心に授業を検討し、スタートカリキュラムを作成している。研究内容①の参観・協議によって生まれた教員自身の新たな気付きや学びから学校段階間のつながりを見通し、幼児期から児童期へと学びがつながる、連続性のある接続を目指した。接続期のカリキュラム作成についても、教員が協働して作成・検討した。参観・協議で得た教員の気付きをカリキュラムに反映するなど、実践の共有とつなげて改善を重ねている。…図1②

(2) 具体的な研究活動

①保育・授業実践の共有

本学校園の教員が互いの教育実践を日常的に参観し、子供の姿を基に協議した。附属幼稚園の保育実践については、小学校の教員が保育参観を通して5歳児の活動を読み取り、幼稚園の教員と発達に応じた学びについて協議した。附属小学校の授業実践については、幼稚園の教員が生活科の授業参観を通して、記録用紙を用いて子供の姿を記録・分析した。さらに、抽出児を設定し、抽出児についてよく知る幼稚園教員を中心に、1年生前期(4月~7月)の様子を記録・分析した。参観後、抽出児の学習の様子を基に、資質・能力に関連付けて協議した。

また、日常的な交流の他に、定期的に研究保育・研究授業を実施し、研究会を持つことで関係者の気付きを共有する場とした。以下に研究によって得た気付きを例示する。

〈幼稚園教員による気付き〉

- ・幼稚園在籍時から自信を持ちにくく、教員との関わりによって自信を付けて活動に向かって

いたM児について、1年生前期にはつぶやくことで理解を深めたり、自分の気持ちを整えたりする姿が多く見られた。他の1年生前期の児童にもつながる考え方として、「言葉による伝え合い」については、学級全体としての交流よりも隣席の児童との関わりが有効に働くと考える。グループ単位の学習を有効に取り入れたい。

- ・教育実習生に自分のお気に入り話を話す姿から、自分の考えを整理し、伝え方を学ぶ姿が見られた。「聞いてもらう」ということは、非常に大きな意味を持つ。

〈小学校教員による気付き〉

- ・幼稚園を参観した経験から考えると、友達と思いを交わしながら主体的に活動する遊び中心の生活から学級での一斉指導が中心の学習になることへのギャップが大きい。子供は「つぶやく」及び「そばにいる人に伝える」ことによって知識や気持ちを整理しているように感じる。もっと少人数での活動を設定していくとよいのではないか。学級全体よりも個人の興味を重視しつつ、周りとの関わりを設定していくことが大切である。

1年生を担当する小学校教員が、隣席の子に考えを伝える学習活動を取り入れるなど、研究によって得た気付きから授業づくりの改善・充実が見られた。

②接続期のカリキュラムの作成・検証

前項のような保育・授業実践から得た気付きを生かして、幼稚園5歳児（1月～3月）のカリキュラムを検証するとともに、小学校入学時から5月中旬のカリキュラムを作成した。小学校教員が作成したスタートカリキュラムについて、子供の姿を基に継続的に協議し、新たに獲得した気付きや学びによる改善を重ねている。幼稚園教員との協議により、幼稚園からの学びのつながりを記述している。

3 研究の成果と課題（○成果●課題）

- 本学校園の教員が互いの保育・授業を参観して実践を共有し、日常的な交流や合同研究会を通して相互理解を深めた。特に、研究の中心となる教員は週に1時間以上の参観を継続して実施し、他校種の子供の育ちを実感することができた。
- 子供の姿を資質・能力に関連付けて分析するための記録用紙を作成し、子供の姿の記録を蓄積した。1年生の抽出児については、幼稚園在籍時の担任教員を中心に学習の様子を見取り、幼稚園時代の姿と関連させて協議したことで、学びのつながりを生かした指導の在り方を確認できた。
- 保育を参観して幼児の姿を学んだ経験を生かして、接続期のカリキュラムを作成した。さらに、作成したカリキュラムについて協議する機会を持ち、保育・授業実践を基に改善できた。
- 研究推進員を中心に教員の交流が大きく進んだ。今後、5歳児と1年生に限らず、3歳児から6年生までの教育課程全てをつなぐ視点をもてるように、学校園全体に交流を広げていきたい。本学校園の全ての教員が相互理解を深めることを出発点として、来年度の研究に取り組んでいく。
- 本年度、抽出児を設定して子供の姿を蓄積し、実践への活用を試みた。来年度、改善した接続期のカリキュラムを中心に本年度の気付きを生かした実践を繰り返し、実践の中で子供の姿を評価することでカリキュラム自体の評価を進めていきたい。
- 来年度についても継続して記録を蓄積することで、接続期の姿として一般化できる部分を探る。また、本学校園の特色を生かした評価については、抽出児の成長の姿を継続して記録するため、来年度まで継続した取組が必要である。抽出児の学びを評価する方法について、熟考が求められる。

4 今後の取組

今後も、記録用紙を用いて接続期の子供の姿を蓄積していく。特に、子供の変容を具体的に捉えるために、幼稚園から小学校へ全員が内部進学するという本学校園の特色を生かし、本年度に抽出した幼児の姿を小学校でも継続して記録する。抽出児の記録については、5歳児後半の記録と小学校入学後の記録を比較し、変容している部分とその要因を協議する。

また、今年度作成した接続期のカリキュラムを実践し、妥当性を評価していく。蓄積した子供の姿を手掛かりにして本学校園の教員が協議し、改善を進めていきたい。…**図1③**